



## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

我が季節

### 【Zコード】

Z94390

### 【作者名】

雪嶺

### 【あらすじ】

妖を従者とし、この国の中部を守護する宵 おうぞら 家の当主、枢 くろう は、不死に悩む美青年だった。「可笑しいね、生まれた時は人間だつたんだけれど」／ちよつとした恋愛モノの短編です。／11・29 完結しました！

## プロローグ

縁側に腰掛けながら、膝の上の黒猫を抱く。喉を撫でると、猫は気持ちよさそうに、「ロロ、ロロ」と鳴いた。

ふと視線を猫から庭へと移すと、はらはらと桜の花びらが舞い散っている。

この季節が巡ってきたのは、一体何回目だったろう。もう自分で数えるのも面倒くさくなっていた。

どうせ田神が数えてくれている。彼に任せておけば、自分の正確な年齢も忘れる事は無いだろう。

「可笑しいね、生まれた時は人間だったなんだけれど

誰に言つてもなく独り笑う彼は、美しくも儚かつた。

＊＊

それは今から十年前。

黒い猫つ毛のセミロングを揺らした隻眼の客人が、豪勢な家屋の一  
番奥の間に足を踏み入れると、その部屋の主がゆっくりこちらを振  
り返った。

「おや、いらっしゃい

艶やかな声音が凜と部屋の中に響き、客人を迎える。大抵の女  
なら、その女性のような美しい美貌と、すつきり後ろで纏められた  
輝く白髪に思わず溜息を零すだろう。だがそんな色香に騙され流さ  
れるような客人ではない。

「呼び出しておいで出迎えもなしが」

左目だけしかないというのに、客人の眼力は鋭い。無いほうの目を  
隠していない事も一つの理由だろうか。その目に睨まれたら大抵の  
人間は竦んでしまうだろう。だが主はそんな事には微動だにせず、  
あはは、と笑つて「すまないね」と謝るだけだった。軽く受け流す  
主に溜息を突き、客人は「一体何の用だ」と吐き捨てる。すると主  
の表情がぐらりと崩れた。

「…枢 くろろ …？」

思わず名前を呼ぶが、枢は弱く笑んだまま。

「おい、お前…」

「灰 かい …」

名前を呼び返されて、客人、灰は思わず口を噤む。枢は言葉を続ける。

「私はね、もう少し側に居れる、と…」

言い切らない内に、枢の身体がグラリと揺れた。

「枢つ…？」

ガタンツと大きい音を立てて、枢が床の間に倒れこむ。慌てて灰が駆けつけ、大丈夫かと叫ぶ。

だけれどその声も段々遠のいていく。意識が消える直前、最後に聞こえたのは屋敷の者を呼びつける、灰の焦りの含まれた叫び声だった。

「灰、私は彼女を、幸せに出来ただろうか  
私は彼女にとつて、大切な人に成れただろうか…」



## プロローグ（後書き）

初の投稿となります。お手柔らかにお願いします（汗）  
誤字脱字、ご指摘頂ければ幸いです。

それより数十年前の話。

「… つ わ も … ろ 様 つ …」

「～～つ 聞いておりま すか 枢 様 つ … … … … … … …」

春麗らかな縁側に、威勢のいい声が響いた。

「聞いているよ田神、大きな声をあげないでおくれ」

＊＊

そう言いながらヒラヒラと右手を振る枢は、縁側に腰掛けたまま、田神と呼んだ男のほうを見ようとはしなかった。どうせ振り向いたところでイライラした顔を見るだけだ。それよりだったら暖かな春の日差しに包まれた庭を見詰めていた方が気分がいい。太陽の光を含み、たっぷりとした羽織を引き寄せる。やはりぬくぬくとして暖

かい。

「聞いているのでしたら早く跡継ぎをつ！それより結婚をつ！」

聞き飽きた田神の小言に枢は、はあ、と溜息を吐いた。彼の溜息と共に揺れたセミロングの白髪は、太陽の光を反射してキラキラと輝いている。困ったように眉間に皺を寄せたその顔も、眉目秀麗なままで、真ん中で分けた髪の毛がさらにその美しい輪郭を強調する。

「田神、そんなに急がなくても、私はまだ死ないし…」

「人間離れて生きているからこそ、いつ死ぬか分からぬから急いでいるのですつ！」

本当に田神は遠慮が無い。

この国は八つの地域に分ける事が出来る。そしてその各自の地方を陰で統べ、守護している家々を守護八家 しゅごはつけ と呼ぶ。この八家は表面的には自らの地域に住まう人間、そして秘密裏には人間との調和を図る妖等を守護する。人間と妖の無益な争いを避け、共存していく事を掲げるのがこの八家である。彼等は妖を従者とし、身勝手に人間、妖を襲うものを討伐する。それが彼等の裏の仕事である。

その内中部地域を統べ、守護しているのが宵家だ。枢はその宵家の現当主であり、田神は彼の従者である。つまり、田神は妖。宵家に

仕える屋敷の者は八家の仕事を承知しているし、田神自身普段は人型を取つてゐるので、秘密裏の仕事には実際は何の支障も無い。そんなこんなで20代に見える田神がそれ相応の年齢であるのは可笑しい事ではない。しかし何の因縁か、見た目が20代の枢も、かれこれ120年程生きていた。

確實に人間の、宵家前当主の夫婦から生まれてきたから人間のはずなのだが、原因も分からず、彼は今のところ不老不死となつっていた。

（せめて一人つ子じやなければねえ…）

そうすれば結婚や跡継ぎだなんて、何の興味も無い事でこんなに自分が悩む必要はなかつた。

当主の妻ともなるとそれ相応の品格と、妖と渡り合えるだけの能力が要求される。だつたら事情を知つてゐる宵家の人間を選べば良いと思うのだが、残念ながら宵家は圧倒的に女性の数が少ない。その為宵家から妻を選出する事は不可能だつた。

外部の人間を選ぶのは更に困難だつた。妖の事を隠しても、彼は既に人間を守護する美しい当主として名を馳せていた。その当主が100年近く代替わりしていなれば、口には出さなくとも、不老不死として恐れられるのは当然だつた。

よつて彼は未だに宵家直系の血を残す事が叶つていない。だから屋敷の者は、枢の不老不死については触れようとはしなかつた。自分以上に生きている田神以外は。

「「」の屋敷で私の不死についてずかずか言つてくるのは君位だよ」

ぼそりと文句を言つと、田神は、はんつと鼻で笑つて高い所で結つ

た茶髪を揺らした。

「私が言わざして誰が言います?高々100歳で一々気にしそぎですよ」

「あのね、私は一応人間なの。君と一緒にしないでよ

「差別的発言ですね、聞き捨てなら無一……」

田神には一切目を振らず、それでもお互に言い合ひをしながら、枢は膝の上に抱いた黒猫の頭を撫でた。猫は気持ちよさそうに伸びをして、こっちの話なんてどこ吹く風、といった感じだ。

暖かな日差しが、一人と一匹、もしくは一人と一匹を包み込んでいた。

背後でぐちぐちと文句を続ける田神を尻目に、枢は広い日本庭園をぶらりぶらりと散歩していた。少し日が傾いて風が吹き始め、一人の着物をすくう。空には雲ひとつ無く、明日も晴れて暖かい日だと思われた。

そろそろ自室に帰つて仕事でもしようか、そう考えながらも庭の花々を眺めていると、田神が「おや」と後ろを振り返つて声をあげた。枢も一緒になつて振り返る。

「…今度はな…」

振り向いたその先に居たのは、艶やかで真っ黒な長髪に大きな赤いリボン、白磁のような美しい肌に大きい瞳、えび茶の袴に黒の編み上げ靴の、可愛らしい女学生だった。

\* \*

「雪さんではあつませんか」

田神がぱたぱたとその少女に近寄る。

「田神わまつー！」

両手を胸の前で組んで不安そうにしていたその少女、雪は田神を見てぱあっと顔を明るくした。その笑顔がなんとも若々しい。「こんなところで…」「すみません、迷つてしまつて…」 枢が雪に田を奪われ言葉を失つている間に、田神と少女は会話を始める。勝手に進む会話に枢はハツとなり、田神に言葉を掛ける。

「田神、 その子は…」

枢の言葉を最後まで聞かずに、田神は「ああ、」と返事をした。そして雪に枢の方を見るよつに促し、枢を紹介する。

「紹介が遅れました。雪さん、」 ちらりが我らが当主、枢様です「

「…えつ…？」

先程まで笑顔だった雪の笑顔が硬直した。

（やはり、見た田の歳はとらぎに100年以上も生きている当主など、未恐ろしいものですね…）

彼女の硬直の理由を推測し、枢は苦笑いして挨拶する。

「初めまして…？」

にっこり笑うわけでもない当主の態度を恐れてか、雪はびくつと身体を震わして勢いよく頭を下げる。

「つ申し訳ありませんー御当主さまの御前に許可も無くつ……」

「御気になさりや、雪さよ。うちの当主は案外、心は、広いんですね」

意味深な物言いで、枢に代わって田神が雪を宥める。「田神……」と小さく詰るが、本人は何処吹く風。はあ、と溜息を吐いて雪を見遣ると、ま彼女はだ目を伏せていた。

（こわがらせて、しまったかな……）

初対面の少女にすら恐れられてしまつ自分こ、当主として便利とはいえども、少し胸が痛んだ。

＊＊

「あー……。彼女はですね、貴方のお手伝いさん、ですかね」

枢の自室、畳の上で正座をさせられている田神は、田を合わせずにぼそぼそと囁く。

「……田神、勝手にそういう事をするな、と何時も言っていますよね……？」

彼女と別れたあと、仕事の為に自室の文机の向かっていた机はくるりと姿勢を変え、目を逸らす田神に正面から近づき、にっこりと微笑んだ。さっきまでの田神の霸氣はすっかり失われて、蛇に睨まれた蛙のようである。

当主の仕事は当然妖闘連も扱うために機密事項が多い。自分が何者か把握していない人間を側に置いて仕事をするなど、言語道断である。なのに勝手に採用してきたのか。

「出生も経歴も人柄もきちんと保障できますから、ね？ほら、お部屋での雑用のお手伝いさん、最近御歳で退職なさったでしょう。新しい人を、と気を利かせたのです、ええ」

何か歯切れが悪い言い方だ。しかし妻の話も勿論、お手伝いさんの話も田神が気にしていたのは事実。

「…はあ。本当に信頼できる人なのですね？」

田神の視線の先に自分の顔を置いて尋ねると、田神はしつかり視線を返ってきて頷いた。そして先程の歯切れの悪さはいすこやら、しつかりとした口調で切り返す。

「信頼できます。彼女はこの近くの女学院の主席で、元は宵家に仕えていた一族です。先祖が体調を崩して宵家の仕事を辞してからは随分経ちますが…」

その言葉を聞いて机は目をクッと細め、ふむ、と呟いた。

「…では我々の仕事をきちんと知っているのですね」

「ええ、だから彼女を推したのです。将来的に宵家で働くという

事は、元々宵家に仕えていた彼女の家にとつても名誉な事ですから、すぐにお返事を頂けました

「そうですか」と枢は頷く。そしてしばらく考えた後、「わかりました」と返した。

「だけれど田神。そういうのは私に相談してからでもいいでしょ」

「枢様には結婚の事だけ考えていて欲しかったので」

「飄々と返す田神に枢は溜息を吐く。どうしても近年中に結婚させたいらしい。そう簡単にいくとは思えないのだけれど。

「本当に君は……」と言いながらも自分の文机に向き直る枢の背後で、田神は気付かれないようにふうつ、と肩の力を抜いた。

（本当は其れだけじゃないのですけどね……）

視線を宙に泳がせながら、田神は全てを話さなかつたことを心の中で枢に謝つた。と、同時に哀れみの目を向ける。

（宵家の仕事を知っているなら何故恐れられたのか、とか考えないのですかね、この人は……）

『人間離れた人間だから』、なんて妖に比べたら大した事など無いのに。どうしてこの人はこう、不器用なのだろう。



## 我が季節2（後書き）

「こんな早くから書きののもなんですが、伏線等回収し忘れたり、矛盾した内容を書いたりする事がしばしばあると思われます…。」「こじつなつてんだ！」つてのがありましたらどうぞお気軽に…」  
…（汗汗

まだ女学生の身である雪が、自分の都合のいい時に枢の身の回りの世話をしだしてから、約一週間が経過しようとしていた。雪は未だに枢と田を合わせようとしているものの、流石は主席を誇るだけあり、枢が一を言えば十を把握して行動した。雪が来てから仕事が捲っているのはいつまでも無い。

「雪ちゃん、あの硯は何処にしまいましたっけ」

「いやもう御用意してござります。先日仰っていた簪も」

初めて会った時の動搖など見る影も無く、てきぱきと仕事をこなしていく雪は、本当にまだ十代かと疑いたくなる位機敏だった。もう一度言つようだが、流石は主席。

そんな雪が学校の後に手伝いとはいえ仕事などして、学業に支障はないのかと尋ねたら、卒業に要する単位は既にほとんど取ってしまつていて、授業そのものが少ないとの事である。今は卒業したら直ぐにでも育家にきちんと就職できるように、修行や慣れを兼ねての枢のお手伝いなのだ、と田神が言つていた。

だからといって長々と雪を此処に留めて置くわけにもいかない。雪の家は此処から一時間もかかる所にあり、帰るのにすら労力を費やす。人間だから、疲れるのは当然である。疲労で少女を倒れさせるなど、この地を守護する当主としてあってはならない事だ。

「今日はこの辺りで大丈夫です。お勉強でお疲れなのに、わざわざ有難うございました。送りの者を呼びましょっ

筆をことつと文机に置いて、枢は雪に向き直る。そして「おや」と首を傾げた。急に意識を払われた雪は思わず「えつ」と声をあげる。

「いえ、そのまま…動かないで下さいね」

枢がゆっくりと雪に手を伸ばす。動くな、と言われた雪は動く事も出来ず、正座したままおろおろと視線を泳がしている。そつと両手で雪の頭に触ると、枢は後頭部に付いている桜色の大きなリボンの位置を、ちよいちよい、と直した。

「これで良いです。沢山お手伝いしてもらいましたからね、少し乱れていました」

リボンがきちんと直つた事を確認した枢はにっこり笑い、スッと立ち上がりつて「もう口が傾いてきましたね」なんてのんびり咳きながら、送りの者を呼びに部屋から出て行った。  
後に残された雪は、田神が呼びに来るまでの間、身じろぐりとすり出来なかつた。

\*\*

「…何かしましたか」

「…心当たりがないのだけれど」

雪が帰った後、枢は田神に問い合わせられていた。家に帰るまでの間、いつもお喋りに花を咲かす雪が一言も発しなかつた、と送りの者が報告してきたらしい。

「…不用意に近づいたり、触れたりとか…」

「あ、リボン直してあげたね」

「それが…」と田神は右手で頭を抱えた。そして「あのですね、」と枢に切り出す。

「貴方のその無駄に麗しい顔を、何の前触れも無く一般人に近づけるんじゃありませんて、いつつも言つていいでしょ」「んづ」

宵家に仕える者達は皆枢には慣れてしまつて、からいい、だけど俗世の人間に貴方の顔は強烈過ぎる、と溜息を吐きながら田神が言った。何だかひどい言われ様だ。

「あの子は別に私の顔がどう、とかでそうなつたとは思えないのだけれど」

一週間接して普通に話せるようになり、当主が普通の人間と変わらないのだと理解したものの、心の何処かで恐れている当主が急に近づいてきた、だから固まつてしまつたに過ぎないだろう。私の顔は悪くない。

「それでも、ですよ。雪さんも女性なのですから。貴方の顔に反応しないとは限らないでしょう。まあ本当に恐れただけなのかもしけませんが、それも頭に入れておいてください。」

…いやしつかし…。顔目当てでも良いから貴方に言い寄ってくれる人が居れば、その無駄に麗しい顔も役に立つのでしょうか…」

注意をつらつら述べているかと思つたら、すぐにこれだ。マジマジと桺の顔を見詰めながら、暗に不死だから結婚出来ないのですよね、と田神は結婚を勧めるくせに嫌味を言つ。初めて会つた時よりは大分マシになつてはいるが、それでも宵家の当主に向かつて笑顔で嫌味を言う田神は何とも妖らしい。

そんな田神をじーっと睨んでいると、田神はなにやら思い出したようだ。「これを浴室の壁にでも貼つとてください」、と半紙のようなものを手渡してきた。その半紙には『不必要な接近禁止』の文字。

一体何の嫌がらせだ。

当主なれど、その身は人間。胴を絶つか、首を落とすか、心の臓を突くか。どうすれば死ぬのかは誰にも分からぬ。ただその身体が衰え朽ち果てる事は無く。

＊＊

どうすれば田を合わせてくれるのか。最近は仕事の内容よりもそんな事が気になる。一般人が自分を恐れていることは理解しているが、それでも宵家の本家の中で、雪のように自分と距離を置いている人間が居るのは珍しい事で、どうにも気になつて仕方ないのだ。せつかくそれなりに会話が出来るようになつたのに。

「はいはいはいはい。何ボケーッとしているんですか」

ぐるぐると考へてゐる思考を、田神がブチッと遮断した。いつもいつも思うのだが、田神はいさか無遠慮過ぎる。暗くて広い森の中をガサガサと歩きながら、枢は肩を竦めた。だが今は仕事の最中で、悪いのはボーッとしていた自分である。

「じめん田神。ちょっと考へ事を、ね。さつと終わらせて帰らつ  
か

「まつたく本当ですよ…。ああ、そういえば近くの下街に美味しいかすてら屋さんが出来たそうですが、帰りに買つて帰りましょう。雪さんは甘いもの好きですかねえ。私は大好きですから、五箱位買つて帰りましょうか」

真面目にやれ、というのかと思えば、当の本人ものほほんとの調子である。それもそのはず。今日の仕事はわざわざ当主が赴いてまでやるような事ではない。ただ単に「最近運動不足だ」という田神の要求に応えただけだ。

「好きにするといいよ。雪さんが来るのはあと一時間後だから、あと一刻ほどで終わらせてくれるかい」

「そんなにかかりませんよ」、そう言つて田神はにっこり笑う。するとその田がスッと細められ、鈍い紅色に変化した。そういえば元々この田付きだったか。赤茶の長髪も真っ黒に染まる。スンシと辺りの匂いを嗅いで、田神は嫌そうに眉間に皺を寄せ、苦々しく口を開く。

「ああ、匂いますね。微量ですが、人の、血の匂いだ」

その言葉に枢も眉間に皺を寄せる。

「そり。…いいよ、田神。こんな本家の近くで堂々とやるなんて、どうせ小物だもの。片付けてしまって」

田神は苦々しい表情のまま「クリ」と頷き、瞬時に姿を消した。当主の仕事としては小さな仕事だけれど、本家に近い場所で迅速さを求める仕事だから、身体をほぐすことを兼ねて田神がやるのは最適だらう。

( 本当はほんと な事無く、 平和に暮らせれば 一番なのに… )

無意味に人に害をなす妖、 妖に害をなす人間。 どちらも手をとつて生きていく事は、 どうしてそう簡単ではないんだろうか。

\* \*

「あああっ 雪さん今日はっ！すいません、 ちょっとこのかすてら食べて待つてくれませんか！さつき味見したんですが、 すっごく美味しいので！お茶はもう密間に用意してありますから！ではまた後でっ！」

約束の時間になつて宵家の玄関をくぐると、 そこは外の暖かな日差しと可愛らしい鳥の鳴き声とは一転、 ザわざわと屋敷中がざわめいて修羅場と化していた。 入るなりかすてらの箱を押し付けられ放置

された雪はぽかん、としたまま固まってしまった。

屋敷の奥からは「味見なんとしてたんですか！」という使用人の叱責と、「すいませんね美味しかったですよ…」という悪びれない謝罪が聞こえてくる。

（今は…、田神さま…？髪が物凄く乱れていらっしゃったけれど…）

バタバタと走ってきてバタバタと去つていった田神は、着ている着物も然る事ながら、いつもはしっかり結い上げられた髪も垂らしたままで、ぐしゃぐしゃに乱れていた。何か大変な事が起こっているようだ。

邪魔になつてはいけないと、雪はそろりと屋敷に上がり、好きに使えと言わっていた客間に足を運んだ。騒ぎは屋敷の奥で起きているようなので、奥にある御当主さまのお部屋には行かないほうが良い、との判断の上である。

（でもこれでは今日のお手伝いは出来ないのではないか…）

こんな屋敷中大騒ぎしててるのであるから、自分の手伝える事なんて無いんじゃないか。今田は帰つたほうが田神にも気を使わせなくて良いのではないか。色々考えてしまうが、屋敷の者が総出で奥に行つてしまつていて、相談する事も叶わない。

とりあえず宛がわれた客間に入り、先程頂いたかすてらを食べる準備を始める。食べながら考えて、それからゆっくり結論を出そう。客間にはもう茶器や皿が用意されていて、後はかすてらを箱から出すだけの状態だった。と、思ったのだけれど。

「…かすてらを食べる為のものが、ありませんね…」

楊枝が何か無いかと辺りを見渡すが、それらしい物は見当たらない。田神達も急いでいたから仕方の無い事だ。しかしだからといって手で食べる訳には行かない。無作法過ぎる。

（……お台所は、確か奥の方でしたよね……）

屋敷の奥は未だにてんてこ舞いなようだ。だけれどソッと行つて自分で準備し、ソッと帰つてくる分には邪魔にはならないのではないか。食べないのは逆に田神に失礼に当たるだろ？ 決めたからには雪の行動は早かつた。

「え、と……」の辺を右に…

初めて行く台所を、最初に聞かされた道順を口で唱えながら辿る。周りを使用人が走り回つてるので、ぶつからないよう壁をつたいながら歩く。そろそろ着くかな、と思ったその時。

「離れなさいつてば……」「うあ…………」

「うつさい黙れ近寄るなこの化け物…………」

「一人とも叫ばないで下さい…………」

もう少し奥にある大広間から、田神の大声と、聞いた事の無い若い女性の声、そして何やら焦つている枢の声が響いてきた。

(どうしたんだショウ、化け物つて…)

あまりに騒がしいその様子に、雪にちょっとした好奇心が湧いて、広間の襖に近づく。ちょっと覗く位いいだろうか、怒られるだろうか。でもいつも冷静な御当主さまが叫んでいるなんて、滅多に無い事だ。少し位見てみたい。雪はそっと襖を開けた。

「…え」

そこには、若い女性を引き離そと躍起になる田神、そしてそれに反して何が何でもしがみ付いている女性、最後にその若い女性につかりと抱きつかれていた、枢が居た。

## 我が季節4（後書き）

活動報告でもあげましたが、短編を予定しているので展開が早いです。

何卒ご了承下さいませ…；

「あやめ雪やべりーーー。」

いつの間にかしつかりと開けられた襖の先に雪を見つけた枢が、畳に身体を倒しながら素つ頬狂な声で叫ぶ。その声に田神もハツとしまづつた、という顔をした。それに気付いたのか、枢にべったり抱きついていた女性も此方を見遣つて叫ぶ。

「あや、今度は何なのよーーー。」

「つてだから！ 枢様の耳元で叫ぶなと言つてこらでしょーーー！」

明らかに自分に敵意を向けているその女性に、雪はすっかり竦んでしまった。

「え、あ、あのつ……つ失礼しましたつ……」

「えつ、雪やべりーーーちよつと待つて下さり……」

枢が最後まで言い終わる前に、雪はバツと身を翻し、すぐさま廊下を走り戻つていった。

「…いいですか、貴女のせいでも要らない誤解が生まれて、私の計画がぶち壊しですよ！…！」

暫くして大分落ち着いた屋敷の中では、それでもまだ田神の大声が響いていた。さっきの焦りの叫びとは違い、今度は怒り声である。内容が枢に聞かれれば怪しまれるものであるのに、彼はそこまで気にしている余裕が無いようだ。

「だあかあらあつ！…！悪かつたつて言つているでしょう！…ちょっと興奮状態だつただけじゃない！…いきなり血塗れの妖が目の前に現れたら誰だつて吃驚するでしょう！」

それに返す女性の声も盛大なものだつたが、枢の耳には雑音としてしか入つていない。それどころかすっかり落ち込んでいた。雪に誤解されてしまった。確認せずとも分かる。その証拠に雪はその後すぐ、挨拶もせずに帰つてしまつていた。

「吃驚といつ可愛い度合いじゃなかつたでしよう！…半ば錯乱までして！…ほら、枢様を見なさい！」の可哀想な背中！…」

「放つておきなさい！誰のせいですか！…！」

枢が聞いていないのを良い事に叫ぶ田神に、さつきまで右から左に話を流していた枢が、バツと振り返り抗議する。これも全部田神と

黒髪をきつちりと纏めたその女性、遠い親戚の朱音 あかね のせ  
いである。

仕事を終えて帰る直前、久しぶりに嫁ぎ先から遊びに来ていた朱音  
が、ばつたりとまだ人型をとつていなかつた田神と会つてしまつた  
のである。

田神の妖としての姿を初めて見た朱音の視界に枢の姿は入つておら  
ず、血に塗れた田神を巷で騒がれていた（さつき片付けてきたばか  
りの）妖と勘違ひし興奮状態に陥つてしまつた、といふわけである。  
元々宵家の裏の仕事にあまり関わらない、分家の人間であった朱音  
に妖に対する免疫は無く、そうなつてしまつたのも仕方ない。だが  
なんともタイミング悪く来てくれたものだ。

「うちの旦那が最近良いお茶が入つたから当主様に持つていくとい  
いよ、と言つたものだから。本当に申し訳ありませんでした…。  
ほら、田神も謝りなさいよ！！！！！」

「私のせいにしますか！！大体育家に関わる身でありながら、妖見  
たくらいで一々暴れないと下さりますか！」

「私の家は表面の仕事に関わる家だつて言つてるでしょー・免疫無  
いんだから仕方ないじゃない！」

「貴女の旦那は妖の方の仕事をしているでしょー！」

「私はきちんと分ける人なのよ、残念ながらね……」

途中から、いや最初から謝る気はさらさら無いらしい。人型の田神には何の抵抗も無いらしい朱音は、勢いよく田神に食いかかっていて、いつまで経つてもこの口論は終わる気がしない。

（本当に、明日から氣まずい…）

きちんと朱音の事を説明すればいいのだが、その為には田神の事から説明しなくてはいけないだろ？ 田神どころか、他の妖も雪の前では人型を貫いていて、雪は誰が妖かは把握していない。いくら（朱音と違い）妖に関する知識を要している雪といえど、混乱しかねないので、だけれどこのまま雪に誤解されたままであることだけは避けたい。

と、そこまで考えて、枢はハツとした。

（私は何でこんなに…）

まだ出会つてから一週間しか経つてない。だけどその一週間、彼女はいつも枢の側に居た。そして彼女は枢に依頼される手伝いをそつなくこなし、いつでも可愛らしい笑顔だった。そして枢は、如何に雪が自分自身と向き合ってくれるかばかりを考えていたのだ。

しかし枢が気付いたその想いがもし本物だとしても、それが叶う事は無い。何故なら彼女は枢の目すら見てくれない。彼女の視界には、枢という男は写っていないから。

「…またお手伝いさんを探すのは、面倒だから…」

ぼそっと呟いて自分自身に言い聞かせる。自分は、彼女に恐れられている。この想いは、邪魔なだけ。

その言葉を聞き取った田神は、朱音の弾丸トークに言い返しながらも、視界の端にしつかりと枢を捉えていた。

あの綺麗なお方は枢さまの恋人だらうか。だけれど田神さまは何とか引き剥がそうとしていたし、もしや修羅場だつたのだらうか。だとしたらいきなりその場に第三者が現れるなど、自分は本当に失礼をしてしまつたのではないか。

自宅の自室で文机に向かいながら、雪は悶々と考えていた。しかも貰つたかすぐでもそのまま置いてしまつたし、田神さまにも凄く失礼な事をしてしまつた。

（明日、きちんと謝りましょ。…）

宵家本家でのお話を貰つた事は、自分といつより、実家の皆が喜んだ事だ。宵家の仕事に携わつてきた一族としては、本家の仕事にまた携わると言う事は本当に名誉な事で、そして幸せになれる事の代名詞みたいなもの。その家族の思いを無に返すのはいただけない。

（怒つて、いらっしゃるかしら…）

一抹の不安が沸き起つる。自分は初めてお会いした時も非礼を働いてしまつた。もしかしたら、もうクビが決まつているかもしれない。もし、もし許して頂けなかつたら…？

外はいつもより暗い空、雨雲が段々と近づいてくるようだつた。

「昨日はすみませんでした、雪さん。あの女性、枢様の親戚の方なんですけどね、私の事が大嫌いみたいにしてねえ。顔を見ると喧嘩が始まるのですよ。嫌な思いさせてしましたね」

次の日、雪を迎えた田神の第一声は謝罪の言葉だった。第三者視点でさらりと謝罪し、そしてその謝罪の言葉の中にそつと、枢に対しではただの親戚の女性だ、といつフオローを入れる。済まなそうに笑う田神に、雪も咄嗟に頭を下げる。

「そんな！私が勝手にお邪魔してしまって……あつあとお菓子も置いていたままでっ……！」

「いえ、本当にお気になさらず。それにかすてらもきちんと取つておいてありますので、宜しければ今日の休み時間にでも是非召し上がって下さい」

「で、では、枢さまもお怒りでは……？」

「まさか。どちらかといえば変な誤解を生んだことに焦つておりましたよ。どうやって弁解しようか、だなんて。気にしないであげてくださいね」

にっこり笑う田神は本当に氣にしていない様子だ。昨日あんなに悩んだ雪だったが、なんとか大丈夫そうだ。これでお役御免にならず、枢さまのお側でお仕事が続けられる。緊張の糸が緩み、雪は一晩ぶりにホッと一息ついた。

（どう、どうか納得してもらえたでしょうか…）

適当に取り繕つた話に安心した雪の様子を見て、田神自身もほっと胸を撫で下ろした。

雪は田神が宵家の裏の仕事を知る人間の中から、よつやつと見つけた、妖と渡り合えるだけの知識と教養を兼ね備えた最後の望みだ。このまま雪と板の仲がこじれてまた一から探し直し、なんて事になるのは困る。まさしく今も仲睦まじい、とは形容しがたいのだが。あえて言つなら「ああ素晴らしい上下関係」だ。

（それでも悪いよりは十分…前に進む可能性があるならそれで十分…！…！…！）

一生懸命自分に言い聞かせ、田神は進展しようとしてしない主義を中心で詰つた。

（本当にどうして恋愛関係に発展できないんでしょうか…！…！…！…！）

と。

雪さんと柄様があわよくば……等と懶れて考えて、柄が雪を怖がらせることが無いように、雪が柄と距離を置きたがらないように、除々に仲を深めてもらおう等と画策していた田神も、流石の進展のなさに溜息を吐きたくなつた。雪さんの「事情」を考慮して、ちょっと柄を牽制しそぎたのかもしれない。あからさまに自分に対する自信がなくなつてゐる。きちんと伝えておけば良かつたかもしれない。もう一つそのことと、堂々と雪さんとの恋愛を勧めた方がどうにかなるんじやなかろうか。

（やつか、その手もあるのですね……）

ポンッと手を打ち、嬉々として踵を返した田神は、また一人暗躍するのであつた。

\* \*

「雪、ひどいですねえ……」

ちらりと窓の外に目をやると、まるで盆を返したように雨が降りしきつている。せっかく綺麗に咲いた庭の桜も随分散つてしまいそうだ。

枢は小さくため息を吐き、スッと身を翻した。その時だった。

「…え？」

五月蠅い雨の音に混じり、遠くで微かに女性の悲鳴があがつたのは。

## 我が季節6（後書き）

短編のくせに更新遅くなります。すみません；

「うようちようよー、どうしたんですか！」

鬼の形相で、勢いよく「すぱんつー」と田神の部屋の襖を開けた板に、田神はドクシと肩を震わせた。手に持っていた湯のみからお茶が少し零れ、畳に染みを作る。ああ、年末に替えたばかりなのに…。

「雪ちゃんはー…？」

「はー、雪ちゃんならセつき貴方のお部屋に…」

「来てませんー」というか田神！聞いていなかつたんですかー…？」

物凄い剣幕でまくし立てる板に、何が何だか分からぬ田神は狼狽する。とりあえず安全を優先して熱いお茶を机の上に避難させたが、この状況は、どちらが主かは分かつても、どちらが妖かわからない。

「待つてください、聞いてないつて何をですか？この兩音で部屋の外の音など…」

「本当に妖ですかー！」

今し方考えていたことを言われてしまった。田神はブイツと顔を背ける。

「ほ、放つて置いて下をこー。わざわざ本家にこてまでお仕事する奴はありませんからー！」

「貴方という妖はつ……つまあそれはおいといて。それよりつわき、女性の叫び声が聞こえました。そつこえれば雪さんが見当たりません。で、雪さんはツー？」

枢は急に声のトーンを抑えたり荒げたりと、落ち着きなく田神の着物に掴み掛る。

「いえ、貴方の弁解をして、お部屋に案内してからはお姿をお見かけしてはおりませんが……」

「本当に使えませんね田神は……」

「ええいつ今から探ししますよ！探せばいいのでしょう！人を何だと思つて……そもそも人では無いのですよ！もう少し敬意をですね……！」

ふんすか腹をたて立ち上がった田神だったが、何か思い出したように「あ」と小さく声を立てその動作をピタリ、と止めた。枢がその動作を見逃したり、その声を聞き逃すはずも無く、ガシッと襟元を握り締められた。

「何です、何を思い出したなんです、早くお言こなさい。」

まくし立てる様な枢の視線から逃れるよつて、田神はつこーつと視線を逸らし、「あははー……」と苦笑いをした。

「いや、あー、まさか早速落ちるとは…。しかも雪さんの方…。そうか、そつこえれば小屋に不要なものを仕舞いに行くと…こやしかしあー、あそこを通るとね……」

ぶつぶつと呟いてはつきり言わない田神に、ついに枢がしびれを切らした。

「ええいつ何をしたんだ貴様はさつきと吐かんか  
つ……！」

「枢様を落とそうと人間には見えないよう術を掛けて落とし穴を掘りました！！」

「一回死んで来いこの馬鹿者目が……つ……！」

後にこの日は、いつも叫んでも怒っても丁寧な口調を絶対崩さない温厚な当主が本気でキれた日として、使用人の中では厄日として語り継がれていったことはまた別の話。

迂闊だつた。

雨がひどく降つてゐるものだから、庭に広がる竹林の中を近道をして、早く古くなつた硯や巻物を片付けてしまおうと思つたのがいけなかつた。

（まさか、こんなに大きい穴に落ちるだなんて…）

「どうか、この本家において、庭にこんなでかい穴があるとは思いもしなかつた。」

「唯一の救いはあの土砂降りが嘘みたいに晴れたことでしょうか…」

自分が穴に落ちた瞬間、まさにそれを狙つていたかのように土砂降りは晴れた。せめて落ちる前に晴れておいて欲しかつた。そうすればもしかしたら落ちなかつたかもしれない。いや、自然現象に対しそんなこと考えるだけ無駄なのだが…。

激しく打ち付けた腰とお尻をさすりながら、雪はぼつかりと切り抜かれた空を見上げて溜息を吐いた。丸く青い空には、周りに生えていた竹がちらりと顔を覗かせている。

人1人すっぽり入つてしまふ穴の中は、雨で土がぬかるみ足元は覚束ず、動くたびに只でさえ汚れていた着物が更に汚れた。試しにと伸ばした手は穴の淵に届くか届かない位の高さで、人並みの運動力を誇る雪が1人で出ることは叶わなかつた。ううん、と雪は首をひねつた。ここに私が居るなど、誰がわかるだろつか。困つたことになつた。昨日も勝手に帰つてしまつたし。

「セヒ、ジウシマ…」

「雪ちゃん……」

穴の上に急に顔を現し、心配そうに雪の名を呼ぶその男性は、額に玉の汗をかいっていた。

頃合よく現れたその男性の顔をボケツと見つめたまま、雪は言葉を失つた。こんな時に何を考えているのだろうか。しかし誰かに見つけてもらえた喜びより、先に考えてしまつた。やはり…。やはり。

（枢さまは、お美しい…）

＊＊

「大丈夫ですか!? お怪我は…? わあ早く手を…」

心配そうに叫び、ギリギリまで身を屈めて手を伸ばしてくる枢を見て、雪はハッと我を取り戻した。そして発した言葉は、

「ぐ、枢さま! 御手がつ…お着物が汚れてしまします…」

「……はいッ？」

あんなに心配していた枢も思わず素つ頓狂な声をあげた。え？

枢は上から下へ、白色から灰色の階調の入った着物に、たっぷりとした鸞色の羽織を身に纏っていた。豪華な模様の1つも入っていない地味な着物だったが、肌理細やかな織り、しつかりとした造り、仄かに薫る桜の香りから、誰が見てもその着物は高いものだと分かる。勿論、それを着る人間がそれ相応の人間だということも。

「わ、私なら大丈夫ですから！田神様に頼んで梯子でも持ってきて頂ければ1人で出られますし！…枢さまのお綺麗な御手やお着物を汚すわけには参りません！」

私が勝手に落ちて、勝手に出られなくなつただけなのだ。たかが自分の為に、手や着物を汚してまで、枢さまの御手を煩わせたくなかつた。

だから雪は枢の手を取ろうとせず、必死に首を振つて目を逸らした。こんな塗れで汚れた顔、見られるのですら恥ずかしい。だがそんな雪の言葉に枢はぎゅっと眉根を寄せて、悲しそうに、苦々しく呟く。

「雪さんは、田神の方が、いいのですか…？」

返つてくるだらうと予期していたものと違つ言葉に、雪は「え？」と顔をあげた。そしてその瞬間。

「 ちよつと 一・? 」

雪の塗れて汚れた身体は、板の画手によつて、まるで赤子を持ち上げるかのように軽々しく穴の外へと抱き上げられてしまつた。そして、

「やめ、いいと抱きしめられた。

## 我が季節8（後書き）

この辺から内容の矛盾とかありそうで物凄い恐いです。  
「どうぞ」指摘ください…！

「わかつてないですね雪さんは…」

優しく抱きしめへたり込む枢に雪は一瞬固まつたが、即座に我を取り戻す。この前急接近された時は固まつたまま動けなかつた。進歩した。

「ああああああのっ！たたたた助けていただいてありがとうございますっ！あのっあのっ！！！枢さまのお着物が汚れてしましますのでっ…！」

「洗えばいいので大丈夫です」

慌てふためく雪とは対照的に、枢は落ち着いたまま、ぎゅうっと顔を雪の肩に埋めて、小さく答える。すると雪の身体がビクッと撥ねた。だが枢は気付かない振りをする。

「わかつてないですね、雪さん。着物なんて、幾らだつて代えがききます。でも貴女は、お一人しかいないのですよ…？」の前だつて、妖が騒ぎを起こしたばかりなのに…」

静かに話す枢に、雪は顔を真っ赤にしながらも、ついつと視線を枢の後頭部に寄せた。白銀の御髪が、太陽の光を反射してキラキラと輝いている。

（綺麗…）

そり、綺麗。凡庸な自分とは、全く釣り合わない。枢も、田神も、あの親戚だという女性も。皆が皆、美しい。

「く、ろろ様…あの、私落ち着きました…。離して頂いても宜しいでしようか…？」

グッと息を飲み込み、雪はゆつくじと言葉を吐いた。だが、

「私の話を聞いていましたか、雪ちゃん」

「つー」

枢は雪を開放するどころか、更に腕に力を込め、強く抱きしめた。

「わ、私の代えなど幾らでもききますー。枢さまは大変お美しく聰明でいらっしゃいますからっ…」

「私の醜態なんてどうだつていいのですよ」

そういうて枢はバツと伏せていた顔をあげた。その視線はしつかりと雪を捉える。咄嗟に視線を逸らそうとする雪の顔を両手で柔らかく包み込み、枢はちょっと苦笑しながら軌道修正した。

「私の目を見てください、雪さん」

何度も呼ばれたか分からぬ名前に反射するかのように、雪は初めて枢に視線を返した。そして「あ」と呟く。今まで気付かなかつた。枢さまの目は、普通の方と一緒に、深い黒目だつだんだ。吸い込まれそうな、真つ黒な瞳。

「初めて田が会いましたね？雪さんは私の事が、恐いですか？」

まだ困ったような顔をしたまま、枢が首を傾げて問う。その台詞にハツとした雪は、田を伏せ、固定された頭を出来る限りで横に振つた。

枢さんは勘違ひしていた。自分が不死だから、私が恐がつたのだと。違う、違うんです枢さま。私が、どうして枢さまを不死だからって恐れる必要があるのですか。枢さまが私達のために、全ての命が平和に生きていけるように、いつも粉骨碎身してきたことを、知らないものなど居ましようか。

一向に視線を合わせられない私に優しくしてくれた貴方を、不死だからと、厭うわけがあるのでしうか。

そう、ただ恥ずかしかつた。凡庸な私が、枢さまのような麗しく尊い方に見られることだが。

だから私は、畏れた。

「私の美貌なんてどうだつていいのですよ」

同じ言葉を繰り返した枢に、雪は自分が無意識に考えを口に出していたのだと気付く。頬が上気して、バツと視線をあげると、そこには枢の笑顔があつた。

「なんだ、そういうことなら、早く聞いていればよかつた。ふふ、田神の言つていたことも、あながち嘘ではありませんでしたね」

『雪さんも女性なのですから。貴方の顔に反応しないとは限らない

でしょ。『うう』言っていた田神の顔が思に出される。たまには的を得たことを言つことがあるようだ。

にこにこ笑つて、顔を固定していた手を離し、右手で頭を撫で始めた極に、雪は目をパチクリさせながら困惑していた。あ、頭を撫でられている…？

「貴女は気付いてないのでしょ。か？貴女はとても可愛らしい女性ですよ」

いきなり掛けられた褒め言葉に、雪は絶句した。視線を外すことも出来ず、ジッと極を見つめる。

頭を撫でていた手が、ゆっくり頬に下ろされる。雪の頬は、まるで林檎のように真っ赤になっていた。

「初めて貴女に会った時、私は貴女に目を奪われました。これが一眼ぼれというのでしょうか？お恥ずかしながら、暫く言葉を失つてしましました」

彼は嬉しそうに言葉を続ける。う、あんなに可愛いと思つた女性は初めてだった。艶やかで真っ黒な長髪、白磁のような美しい肌に大きい瞳、少し上気して桜色に染まる頬。可愛らしい、可愛らしいあの子は、一体誰のものなのだろう、と。

「貴女が私を見て恐れた時、凄く、悲しくなった。そして思いました。『この子に私を見て欲しい』と」

だがすぐにその感情に気付かない振りをしてフタをしてしまった。自分は恐れられている。だったらこれ以上溝を深めるべきではない。でも、彼女が、私のことを。

「私のこと、不死だからと恐れないでくれてありがとうございます。大分気についていた事だったのに、凄く嬉しいです。この不死は、私にもどうにも出来ないものでしたから」

不死をおそれられているのではない。彼女が恐れているのは、畏れているのはこの容姿。だったら、この感情に、フタなどしなくていいのではないか。どんな恋愛とも、同じ開始地点に立っているのではないか。

「貴女が私を畏れる理由がこの顔容ならば、これを壊してしまえば、ずっと側にいてもらえるのでしょうか」

その物騒な言葉に、雪は驚き、思わず枢の胸元に掴みかかる。柔らかい布が、くしゃりと皺を寄せた。

「なつ何をおつしやるのですか……枢わまにそのよつなことつ……！」

泣きそうになる雪を見て、苦笑しながら、枢は掴みかかった雪の手を解き、両手で包み込んだ。

「聞いてください雪さん。

今は貴女にとつて私はある意味顔の恐い、只の当主かもしません。でも、私は貴女を好いています。だから、私に機会をくれませんか？」

「」こんな短期間でいうのもあれですが、」と枢は少し恥らつて言葉を続ける。

「貴女が好きです。側にいてください。1人の女性として」

雪は息を呑む。

この美しく優しい人に愛される人は、どれだけ幸せなのだろうと考えたことがあった。そのときは、分不相応にもそんなことを考えてしまった自分を恥じたが、これは、現実だろうか。

困惑する雪を見て、枢はくすりと笑つた。そして、悪戯っぽく笑つて、

「それとも雪さんは、色んな人から恐れられて寂しい私を放つて帰つてしまつのですか？」

とのたまつた。

尊敬する当主、憧れを抱く男性にそんなことを言われて、どうして拒否できるだろうか。しかし、問題がある。

「わ、私…す、すぐに異性として接することが出来るかというと、あの、その…。あ、違うんです！枢さんにそういう魅力がないとか言つてはいるわけでは…！枢さんと一緒にできるだなんて、思いもせぬ…えと、その、我まだ枢さまを直視できませんし…えつと…！枢さまは、えと、私…！…！」

混乱しながらわたわた話す雪をみて、枢は「あはは…」と笑い出した。

「あははっ、雪さんたら。ほら、落ち着いてください  
ぽんぽんと雪の頭を撫でる。

「ゆつくりでいいんです雪さん。ゆつくり私のこと、当主としてではなく、1人の男として知つてください。私も頑張りますから、ね？」

綺麗な笑顔で笑いかけるその男に、雪は堪えていたものがついに崩壊し、また固まってしまったのであった。

## 我が季節9（後書き）

雪の「事情」＝綺麗な男性の顔が直視できない、でした。  
わっかりにくい伏線ですみませんでした…！

分かつっていた。

いつかはこの日が訪れることがくらい。

分かつっていたのに。

それなのにまだ、現実を受け入れられない。愛して、愛されて。あんなに幸せな日々が終わつたことが、まだ受け入れられない。

＊＊

1年かけて、やっと結婚を受け入れてくれた時、物凄く幸せだった。1人の女性として、妻としていつでも笑いかけてくれる彼女がいれば、不死のことなんて忘れてしまえた。ずっと側にいれるだなんて、妄想を抱いてしまうこともあつたほどの幸せだった。

年月を重ねると、やはり一抹の不安が沸き起つた。残されていく恐怖。

幾ら不死とはいえ元は人間。今のところ不死なだけ。だから首を落とせば死ねるかもしれない。死ぬ時は一緒に死にたい。そんなことを言つて、物凄く怒られたことを思い出した。彼女はいつだつて私のことを考えてくれた。ずっと彼女に頼つて、甘えてばかりだった。

思い出すことはあつても、思い出になんてならない。彼女と過ごした一日一日が、忘れられない宝物だった。

私は彼女を、幸せに出来ただろうか。

私は彼女にとつて、大切な人に成れただろうか。

『自分から死んだりしたら許しませんからね』

記憶の中、弱弱しい声で、だけどしっかりと笑つて彼女は言った。  
そうだ、彼女は、私に約束を残していくた。

『お約束してください』

記憶の中で、伸ばしてきた彼女の細い手を両手で包み、こくつとうなづく。

『私が愛したこの世界と桺さまを、桺さまも愛してください。そして、守ってくださいね。私もいつまでも、世界を、貴方を愛してあります』

そんな別れの言葉みたいなことを言わないで。そう言いたかつたけれど、優しく微笑む彼女に、ただ泣きそうになりながら頷きを返すことしか出来なかつた。寂しそうに、辛そうに顔を歪める桺に、彼女はそつと言葉を掛ける。

『そして忘れないでください。私は、』

「雪は、桜やおと季念えて、本当に幸せでした」

＊＊

「落ち着いたか」

そうこうして布団に横たわる雪家の当主に、灰は濡らした手ぬぐいをぐいっと押し付けた。

「病人ではないのだけれど……」

まだぼやける視界の中から白い物体を選び、手に取る。ひんやりとしていて、意識も次第にはつきりしだす。

「真っ青な顔して倒れておいてよく言つたな」

あきれ返つて彼はため息をついた。枢はまだ感覚の鈍い身体を無理矢理起こし、彼に苦笑を返す。

「「じめんね」。でも、おかげで懐かしい夢を見たよ。幸せな記憶全部、とはいかなかつたけど、うん、もう大丈夫。大事なこと、思い出したから」

急に倒れておいて、起きたら笑顔の枢を見て、灰は不思議そうに繰り返した。

「大事なこと？」

枢は笑うだけで答えない。

彼女は最期に生きる意味をくれた。答えをくれた。

いつまでも幸せだった記憶に埋もれ、訪れた現実を拒絶している暇など無い。生きるしかない。

彼女との約束を、果たすために。

＊＊

縁側に腰掛けながら、膝の上に黒猫を抱く。喉を撫でると、猫は気持ちよさそうに「ゴロゴロと鳴いた。

ふと視線を猫から庭へと移すと、はらはらと桜の花びらが舞い散っている。

この季節が巡ってきたのは一体何回目だつたろう。

「可笑しいね、生まれた時は人間だつたんだけれど

だけれどその不死に今は感謝している。彼女と出会えた。彼女との約束を果たせる。だから一生懸命生きよう。春も夏も秋も超え、冬の到来を迎える為に、一心不乱に世界を愛そう。そうすれば、

「貴女の季節がやつてきますね」

また君に会える。

## 我が季節1-0（後書き）

はじめにお付き合て頂きありがとうございました！  
タイトルの意味が分かつて頂けたでしょうか？分かりづらございます  
ルから文章まで、本当にすみませんでした；  
このあと一話ほどおまけがついてますので、よろしければJR観下  
さい＾＾

一応守護八家シリーズも展開していく予定です。  
それでははじめありがとうございました！

## 我が季節一 おまけ

「いやはやいやはや。雪さんが寛容な方で、ほんっ…とうに助かりましたよ。いろんなうわの当主と結婚していただけんですかー。」

応接間で三人でお菓子を囲んでる中、田神は一人で良かつた良かつたと、喜びながら茶を啜つていた。

間違つて雪さんを落とし穴に落とした一年前は死ぬ程枢にとつちめられたが、今この現実を迎えてみれば、結局は良い思い出である。結果おーらいと詰つやつだ。

反省の色が見られない田神を、枢はじろりと睨んだ。

「私の結婚に対する雪さんの寛容振りより、あんなふざけた事して許してくれた雪さんの寛容振りに感謝しなさい」

田神は「はいはい」と空返事をして、今度は水饅頭に手を出し、美味しそうにほお張つていた。聞く耳持たず、と言つのはこの事だ。

「はあ…。本当に、昔は森一つ治め、常に血に飢えた名高い妖だったとは思えませんね」

「そうなんですか?」

今まで給仕をしながら、じじじじと静かに話を聞いていた雪が、びっくりしたように声をあげた。いつものほほんと優しい田神さまの正体が妖だとは知つていたが、そんなに恐い妖だったのか。いや、枢さまの従者なのだからそれなりの強さだとは思つていたのだが、今の温和な雰囲気からは到底想像出来なかつた。

驚いている雪を見て、田神は嬉しそうに笑つ。

「 わたなんですよ雪ちゃんー私も本当は凄いのですよー。」

「 見る影もありませんかどね」

「すぐここに柩がぴしゃりと置こ切る。」

「柩さま、そんな風に……」

雪が田神を可哀相に思つてフオローを入れる。その雪の気遣いに、田神はよよく、と涙を流す、

「 雪ちゃんは本当にお優しいですね……。」

振りをしながら、今度はバクバクとウグイスもちをほお張つた。

「 ……どうしかにしなさい田神……」

柩は呆れ返つて又ため息をつく。

この甘党妖が本気をだせば一瞬で山一つ消せると言われている妖だとは、一体誰がわかるだろうか。

「つ……」

真つ黒な長髪を血でじわじわにしたその”男”は、鈍い紅色の瞳に憤怒の感情を露わにしてこちらを睨んでいた。口からは血が流れ、同じく黒の着物も血でごわごわで、ボロボロになっていた。

「本当、てこずりましたよ……。貴方と話をするために、何で一々戦わなくちゃいけないんですか。痛いのは嫌いなんんですけど」

そういうて崩れた着物を直す男の着物は、実際には土が少しついている位だ。銀の短髪をかきあげるその男は汗一つかいていない。

「人間風情がツ……！」

口の中に溜まつた血を吐き出し、その”男”は吼える。だが彼が怯む事は無い。

「人間風情でも、私は代々続く宵家の次期当主ですから。妖と渡り合えるだけの術を持つていなくてはいけないでしょ？？って別に戦う為に鍛えてたわけじゃないんだけど」

はああ、と溜息を吐きながら、宵家次期当主、枢は困った顔をした。そして隣では彼の代わりにその”男”と戦つた小さい従者達が、キキキ…と鳴いている。枢に身を摺り寄せてくる彼らの頭を褒めるよう撫でると、また嬉しそうにキキキ、と鳴いた。

「狼が兔に噛まれることなんて無いと思つてた？せっかく上手く使えば広く活用できる力を持つてはいるのに。頭を使わないなんて、勿体無いの一言だよ」

哀れみを含んだその言葉に、その”男”、黒い狼、まかみ真神はギリッと歯軋りをした。しかし負けたことは事実で、言い返すことは出来ない。

小さな兎の妖ども。そんなの何匹居ようと、森1つの主である自分が負けるだなんて思つてなかつた。話がしたいだなんて人間の話、聞く気もなかつた。

だが、力に任せただけの自分は、その見下していたものたちにあつさりと負けてしまつた。

「人間なんて、君にしたら下等生物だろう？だつたら、私の下につけばいい。ありとあらゆる妖と戦わせてあげる。まあ出会つた妖全部が全部、とはいかないけど。それだと守護八家の意味がなくなつてしまつから」

その言葉に、真神は顔をあげる。

ああ、こいつ、守護八家人間だつたのか。そうえいば、この辺りの守護家は宵家だと、どこかの妖が言つていたな。自分は討伐される側だらうから、別に詳しく知る必要も無いと思つていたのだけれど。

「私に力を貸してくれるなら、君の今までの行いには目を瞑る。どう、悪い話ではないんぢやないかな？討伐されることもなく、もつともつと強い妖と戦える機会も得られる。ね？いいじと呟くめ」

彼はにつこり笑つて腰を屈め、視線を真神とあわせた。

真神は強く彼を睨み返す。

「俺である必要などない。俺より強いその鬼共が居れば十分だろ、」

「言つたでしょ、せっかく上手く使えば広く活用できる力を持っているのに、どこの子達を超える可能性を君は持つてると私は踏んだ。だから君に決めたんだよ、私の主要従者に」

何を勝手に、と言おうとしたが、口が開いただけで、音が出ない。どこかかしらで、一度惨敗したこの人間にはもう敵がないという諦めが生まれていた。

「…好きにすればいいさ…。どの道あなたには勝てないのは目に見えている…」

あわせていた視線を逸らし、真神は悔しそうに吐き捨てた。討伐されるか下につくか。それしかない。枢は「よかつた」と心底安心したように笑つた。そして「うーん」と何事か考え始める。

「名前、真神だとそのままだからねえ…。どうしようか?ちょっと軽く田神とかどうだろ、」

「どーでもいい…」

「じゃあ田神でいいか」

そんな風に軽いノリでつけたその名前通り、あの恐れられていた真神があんな軽いお氣軽甘党になるとは、その時枢どころか本人にも知る由はない。



## 我が季節一 おまけ（後書き）

おまけ、いががでしたでしょうか。

本当にありがとうございました！

田神の正体は古い狼の妖でした。

本編ではあまり出てこなかつたので。

いえ、ここでもそんなに活躍しませんでしたが（笑）

それでせりけまでお付き合て頂き、ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9439o/>

---

我が季節

2011年2月19日15時14分発行